
仮面ライダーヴァネージュ

木ノ部 弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーヴァネージュ

【Nコード】

N5091G

【作者名】

木ノ部 弥

【あらすじ】

身に着けた者に力を与える『青き強者の環』。北花壇騎士タバサは、その力と共に更なる過酷な任務に身を投じる。

第1話

第1話…青い髪の少女

ガリア王国の首都リュティスの東の端に位置するヴェルサルティル宮殿。その一角に、薄桃色に彩られた小さな宮殿プチ・トロワがある。北花壇警護騎士団の一員として、いつものように団長から呼び出しを受けたタバサは、自分の使い魔である風韻竜の背に跨り、その場所に向かっていた。

プチ・トロワの上空に到着したタバサは、使い魔を前庭に降り立たせる。彼女達の姿に気付いて二人の衛士が駆け寄ってきた。タバサは衛士の片方に使い魔の食事の世話を頼むと、正面の大きな扉を潜って中に入った。

しんと静まり返った石畳の長い廊下を渡り切ると、目の前に一際頑丈そうな両開きの扉が現れる。扉の左右には門番のガーゴイルが一体ずつおり、用の無い者を部屋の中に入れないよう見張っていた。

タバサが扉に近付くと、一瞬遅れてガーゴイル達が勝手に動き出す。それぞれが左右の取っ手を別々に掴み、波長が合うかのような揃った動きで扉をゆっくりと引き開けた。タバサがここに着いたことは既に伝わっているのだろう。彼女は役目をこなしたガーゴイル達を一瞥すらせず、静かに扉を潜った。

部屋の中に足を踏み入れると、何かがタバサに向かって飛んできた。空のグラスだった。だが、彼女は慌てた素振りも見せずに半歩だけ後ずさる。一瞬前までいた床の上にグラスが落ちて、粉々に砕け散った。足元にはグラスの破片が散乱したが、タバサの体にはか

すり傷一つ無かった。

「あーあ、まーたよけられちゃった」

出し抜けに掛けられたわざとらしい声に、タバサがその方向を見やる。そこには豪華な造りの椅子に踏ん反り返り、見下すような視線をこちらに向ける青髪の少女の姿があった。この少女こそ、現ガリア国王の娘にしてタバサの従姉であり、北花壇警護騎士団の団長でもあるイザベラだった。

タバサはイザベラの御前に寄ると、片膝をついて深々と頭を垂れる。

「やるじゃないの、人形娘。でもね、そのせいでお気に入り的小姑娘が割れちゃったよ。この分は今度の手当てから引かせてもらおうかな」

イザベラが顔にいやらしい笑みを浮かべながら言ったが、タバサは黙り込んだままにいる。イザベラは面白くなさそうに顔を歪め、話題を変えた。

「お前は今やうちの騎士団の有望株。これでも結構期待されてるんだよ、お前は。でもね、それは誰のおかげだと思う？」

イザベラは手に持っていた扇子をパシッと畳み、その端を大仰な仕種で自分に向ける。

「このわたしよ、ワ・タ・シ。本来なら行き場を失うはずだったお前を、この北花壇警護騎士団の団長である心優しいイザベラ様が助けてあげたんだよ。つまり、わたしはお前の命の恩人でもあるって

わけだ。でもねえ、人形娘——」

おもむろに立ち上がったイザベラは、頭を垂れたままにいるタバサに顔を寄せて言った。

「どういうわけか、お前から感謝の言葉の一つも聞こえてこないんだよねえ。もう少しわたしの意に添ってくれてもいいんじゃないの？ それともなに？ お前はそんな言葉も出せないくらいのお人形になってしまったのかい？」

イザベラは扇子の端でタバサの頭を軽く小突き回す。しかし、何の反応も示さないタバサの態度に業を煮やしたイザベラは、苛立ちの余り扇子を床に叩きつけた。勢いが強かったのか、跳ね返った扇子は明後日の方向に飛んでいってしまった。

フン、と大げさに鼻を鳴らしたイザベラは、再び椅子に腰を下ろす。そして気を取り直し、タバサに命じた。

「面を上げなさい。人形娘」

イザベラの言葉に従い、タバサが顔を上げる。

「さて、今回の任務なんだけどね……、ちょっとばかり特殊なんだ。ま、あれを見せてからのほうが早いかな」

と言って、イザベラは側に控えていた侍女の一人に命じた。

「例のものをここへ。大至急ね」

「は、はいっ！ 只今！」

まだ顔に幼さを残す若い侍女は、血相を変えて隣の部屋に消えていく。そして、一分も経たないうちに戻ってきた。豪華な装飾が施された化粧箱を、両手でしっかりと抱えながら。

王女がいる手前、失態を見せてはならないと思って必要以上に緊張しているのだろう。箱を落とさぬよう、侍女の注意は手元にばかり向いていた。しかし、それがまずかった。

「きゃっ!？」

侍女が不意に躓いてよろけた拍子に、手から箱が滑り落ちた。硬い物同士がぶつかった音が部屋の中に響く。途端にイザベラ表情が険しくなった。

「ちょっと! なにやってんだよっ!」

「も、申し訳ありませんっ!」

怒号を飛ばすイザベラの前で、侍女は慌てて土下座をした。部屋の中の空気が一瞬にして固まる。

「以後気をつけます。どうか、どうかお許しを……」

侍女の声は涙ぐんでいた。体もがたと震えている。その光景に他の侍女達は思わず目を背けた。酷薄な王女の機嫌を損ねてしまったのだから、この後彼女がどんな目に遭うのかと思うと不憫のあまり、正視していられなかったのだ。

「ん? そういえばお前、見ない顔だねえ」

「イ、イザベラ様、その者は昨日こちらに配属になったばかりです……」

おもむろに疑問を口にするイザベラに、別の侍女が恐る恐る助け舟を出した。

「へえ、つてことは新顔かい……、なら仕方ないか。特別に不問にしてやるよ」

「ほ、本当でございますか？」

突然差し伸べられた救いの手に、土下座をしていた侍女が目丸くしてイザベラの顔を見る。

「本当だよ。今のわたしは機嫌がいいんだ。ただし、今回だけだよ。二度目は無いから今後は気を付けることだね」

「は、はいっ！ 有り難き幸せにございます」

「じゃあ、早く箱を持ってきた」

「はいっ！」

侍女から化粧箱を受け取ったイザベラは、確かめるような手つきで上蓋を開け、中に入っていたものを取り出した。

第2話

第2話…狂乱の宴

箱の中に入っていたものはイザベラの手よりも一回りほど大きく、楕円に近い形を成していた。表面は陶器か、あるいは金属のように滑らかで鈍い銀の輝きを放っており、やや厚みがある。特徴的なのは、一方の面の中央に青く輝く水晶球が半ば楕円の板に埋め込まれるような形で取り付けられており、その横には鳥の翼を模した意匠が左右対称に施されていることだった。

「こいつは『青き強者の環』って言うんだけどね。お前にはこれを使って、そこから得られる情報を集めて貰いたいのさ」

要はイザベラが手にしている物の性能を試せ、ということらしい。だが、タバサには青き強者の環がどういうものか分からない。だから、何をどうやればいいのかも想像できなかった。

「具体的にはどうすればいいの？」

もっともらしいことを訊くタバサに、イザベラが勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「そんなことも分からないの？ 北花壇騎士ともあろう者が情けないねえ……」

イザベラは仕方ないと言わんばかりに溜息をついた。

「しょうがない、このわたしが直々にこいつの使い方を教えてやる

よ。この任務はこっちにとっても重要なんだ。早々に失敗されても困るからねえ。いいかい？　よく見てな」

イザベラは立ち上がると、楕円の板を自分のへその位置に軽く押し当てた。左の翼の裏から革でできた帯がスツと伸びて腰の後を通り、反対側の翼の裏へと繋がる。楕円の板はベルトのバックルとなった。

イザベラはベルトの左側についている小箱から一枚の紙片を取り出す。それを青い水晶球にかざそうとした瞬間、何かを思い出すような素振りを見せた。

「ええと、何だったっけ……、あ、そうそう」

イザベラは凶悪な笑みを浮かべ、言った。

「ヘンシン」

紙片が青い水晶球と重なる。

『change veniege』

抑揚の無い女の声が青い水晶球から響き、かざした紙片が眩い光を放つ。次の瞬間、光は王女の広い部屋の全てを覆い尽くすほどに膨れ上がった。タバサも、侍女達も、あまりの眩しさに目を開けていられないほどに。

「もう目を開けな。人形娘」

妙にくぐもって聞こえるイザベラの声。タバサがゆっくりと目を

開けると、青い影が視界の中で揺らめいていた。目が慣れるにつれて、影がはっきりとした形になる。それは煌びやかな衣装に身を包んだ王女ではなく、濃紺に近い青い色の甲冑を着けた人の姿だった。

しかし、その全てが鎧で覆われているわけではない。覆われているのは頭から肩と胸にかけての部分、それと肘から指先にかけての部分と、膝から爪先にかけての部分だけだ。その他の部分は、鎧とほぼ同じ色の布のような材質で覆われている。将が着る鎧のような華美な感じは一切無いが、虫の複眼を思わせる大きな二つの目はエメラルドの輝きを放ち、甲冑の存在感を際立たせていた。

「なかなかいい着心地じゃないか。ん？　どうしたんだい、人形娘」

普段は氷のように冷え切った表情を崩さないタバサが珍しく驚いていることに、イザベラは満足そうな様子を見せる。

「まだ分からないようだねえ。つまり……こうするのさ！」

イザベラは甲冑姿になった時と同時に手にした杖――甲冑と同じ色をしていてイザベラの背丈よりも長い。また一方の端は、兜の目の部分と同じエメラルド色の小さな水晶球がはめ込まれ、もう一方の端は槍のように鋭く尖っている――の先端を、タバサに向けて突き出した。タバサは相手の出方を予め呼んでいたのか、余裕でそれをおかわす。

「ほらほらどうしたのさ！　逃げ回ってばかりいないで少しはかかっ
つといで！」

イザベラの攻勢に対し、タバサは防戦に徹するしかなかった。相手があのイザベラである以上、迂闊に手出しできない理由があるか

らだ。

杖と杖が打ち合う音に、逃げ惑う侍女達の悲鳴が重なり合う。今や王女の部屋は、狂乱の宴の場と化していた。侍女の一人が外へ逃げようとしたが、扉は硬く閉ざされていてびくともしなかった。

タバサを中々捕えられないことに苛立ちを募らせたイザベラは、より一層激しく杖を振り回す。その時、杖の先で短い呻き声が上がった。杖の穂先が一人の侍女の胸を貫いている。先ほどイザベラの前で失態を犯した、あの若い侍女だった。

「う……うあ……」

目はショックで大きく見開かれ、吐血した口からは嗚咽が漏れていた。

「まーた、お前かい。邪魔するんじゃないよ」

「……………い……」

「なにさ、よく聞こえないねえ」

「……か、……………さ……あい……」

「もしかして謝ってるの……？ でもだーめ。さっきも言っただろう？ 二度目は無いって。だからお前には然るべき罰を与えようじゃないか。例えば――」

イザベラはそう言って、杖を振り上げた。若い侍女の足が床から離れる。

「こんな風にねっ！」

距離をとっていたタバサの方に向けて、イザベラは杖を振り下ろ

した。侍女の体が穂先から抜け、宙を舞う。それが壁となり、タバサからはイザベラの姿が完全に見えなくなった。

侍女の体が床に落下した時、彼女の直ぐ目の前にイザベラの姿があった。杖の切っ先が鼻先に向けられている。

——速い……。

身のこなしに自信のあるタバサでも、今の動きは全く読めなかった。

「ま、こんなところか」

イザベラは杖を退く。青き強者の環の水晶球から光が溢れ出て、イザベラの全身を包み込む。光が晴れると、元の王女の姿に戻った。

「と言うわけさ。だいたい分かっただろう？ 後は自分で覚えていくんだね。じゃこれ、持っていきな」

イザベラは青き強者の環を無造作に放った。楕円の板が床を滑り、タバサの足元で止まる。

「今後のことは追って知らせてやる。せいぜい楽しみにしてるんだね。じゃ、今日はもうおしまい。とっとと帰りな」

床に横たわったままにいる若い侍女は、既に息絶えていた。タバサは着けているマントを外し、それを侍女の上半身が隠れるようにかける。そして青き強者の環を拾い上げると、無言のまま王女の部屋を後にした。イザベラはその後姿を見やり、忌々しげに呟く。

「最後まで面白くないやつ……。少しは悔しがったらどうなんだい……」

イザベラは散らかった部屋の片付けと湯浴みの用意、それに床に放置したままになっている”ゴミ”の始末を侍女達に命じ、不機嫌なまま部屋を出て行った。後に残された侍女達は、誰が言い出すでもなく各々の仕事に取り掛かる。若い侍女のことを哀れむ者は既になかった。

彼女達が心の中に抱くのは、冷酷で残忍な王女に対する絶対的な畏怖——ただ、それだけだった。

第3話

第3話…友の憂い

——タバサ、最近どうしちゃったのかしら……。

トリステイン魔法学院・女子生徒寮。その一角にある自分の部屋で、キュルケは一番仲が良い友人の最近の変わり様について、ぼんやりと考えていた。

二人はある出来事がきっかけで、唯一無二の親友と呼べる関係になった。それからおよそ一年、炎と氷のように相反する性格の二人が今日まで上手くやってこられたのは、互いに相手の深いところにもまで踏み込まなかったからだろう。だからキュルケはタバサの奇行についても、気にしながらも敢えて触れなかったのだ。それが知らずのうちに、数日単位で行方を眩ますという行為をたまに行うことだとしても。

だがそんなキュルケから見ても、最近のタバサの行動は不可解極まりなかった。突然行方を眩ますことが以前より頻繁になったからだ。以前は一月か半月に一度だったのが、今では三、四日程度に縮まっていた。酷い時はほぼ毎日ということもある。当然学院の授業を欠席することも増えたが、それを教師達が気にしている様子は無かった。だが、ここまで来ると流石に心配になる。一度真相を知ろうとして本人に直接迫ったこともあるが、彼女は頑として口を割ろうとしなかった。

他にも気になることがある。行方を眩ます頻度が増えたことと時を同じくして、少し大きめの布袋を常に持ち歩くようになったこと

だ。袋の膨らみ具合からみて、中に何か入っているのは間違いないだろう。だが、結局これに関しても知る手立てを見つけることはできなかった。

一体タバサの身に何が起っているのか。もしかして困難なことに巻き込まれているのだろうか。親友として何も知ることができず、そして何もしてやれないことが、キュルケにはもどかしくて堪らなかった。

しかし、機会というものは思いがけない時に巡ってくる。それは数日経ったある日、昼食が済んだ後の僅かな休憩時間に起こった。

その時、キュルケは本塔と西の塔を結ぶ渡り廊下にいた。学年を問わず一ダースはいると噂される恋人の一人から、今晚のお誘いを熱心に受けていたのだ。いつもなら翌日は無条件で寝不足確定となるところだが、今はタバサのこともあっていまいち気が乗らなかった。

教科書どおりのアプローチを仕掛けてくる相手を、どう傷付けずに断るか……。

そんなことを考えながら、視線を何気なく上に彷徨わせた時だった。青く澄み渡る空に向かって、今まさに飛んで行こうとする一匹の竜が見えた。タバサの使い魔だった。またいつものように出掛けるのだろうか。ならば、こんなことに時間を費やしている場合ではない。断りの言葉は直ぐに決まった。

「ごめんなさい！　ちょっと急いでるの！」

いきなりのことで呆気にとられる恋人（のうちの一人）を置き去

りにし、馬小屋へと急ぐ。馬小屋に着いたキュルケは中で馬の世話をしていた使用人に一言声をかけ、手近な馬に素早く跨った。そして、それをタバサの使い魔が飛んでいく方向に向けて走らせた。

勿論タバサの後を追う為だが、馬の全力疾走程度では空の申し子と呼ばれる風竜に追いつける筈が無い。しかし、無理だと分かっているにもかかわらず追いかけるつもりだった。

そんなキュルケの思いが通じたのか、三十分ほど過ぎたころ、視界の向こうに消えかかっていた風竜が急降下していくのが見えた。前方には広い範囲に渡って森が広がっている。恐らくあの中に降りたのだろう。キュルケはその方向に意識を向け直した。

森の側まで来ると、そこにあった惨たらしい光景をむぎむぎと見せ付けられ、キュルケは一瞬顔をしかめる。地面に倒れ伏す男が二人と、馬が一頭。馬が引いていたであろう荷馬車は横倒しの状態になっており、積荷が倒れた方向に向かって散乱していた。

キュルケは馬から降りて様子を探る。男達と馬は既に息が無い。皆喉元を掻き切られ、そこから流れ出た血が地面に赤黒い染みを大きく作っていた。血の湿り具合から見て、まだそれほど時間は経っていない。積荷の方は一つ一つが荒らされている形跡は無かった。

二人の男のうち、一人は恰幅の良い中年で、もう一人は彼とは正反対の屈強な身体つきをした青年だった。青年の側には六十センチほどの長さがある鉄製の棍棒が落ちている。よく見ると、それは打撃武器としての機能も兼ね備えたメイジの杖だった。

男達は旅の行商人と、彼に雇われた護衛の傭兵メイジといったところだろう。それにしても、この一行を襲ったのは何者だろうか。

キュルケはそのことが気になって仕方無かった。積荷を荒らすでもなく、奪ったのは命だけ。人を襲う獰猛な生物がこの辺に出没するという話も聞いたことがない。もし、これが人を殺すことに何の迷いも抱かない者の仕業だとしたら、タバサは奴らと一体どんな関わりを……。

キュルケは頭を振り、余計な考えを打ち消した。事実がどうであれ、自分の目で確かめるしかない。何の罪も無く命を落とさざるを得なかった者達に哀れみの目を向け、キュルケは一人森の中に足を踏み入れた。

第4話

第4話…青い影

キュルケは周囲を窺いながら森の中を進む。右手には使い慣れた愛用の杖。途中まで組み上げが終わっている呪文は、最後の言葉を繋げば直ぐに発動できるようになっている。

森の中は、日の光が満足に届かないせいで昼間とは思えないほど薄暗かった。草が覆い茂る道なき道は、こちらの意に逆らうかのよう進行を妨げる。急なことで気にかかる暇が無かったとはいえ、足場の悪い場所に適さないヒールの高い靴で来てしまったことを、キュルケは少し後悔した。

しばらく進んだ後、キュルケは急に立ち止まった。辺りにただならぬ雰囲気漂っている。それを感じ取ったからだ。

森の中とはいえ、春の半ばとは思えないような妙な寒気が肌に纏わりつく。時々聞こえていた小鳥の囀りや、風によって枝葉が擦れ合う音もぱたりと止んでいた。

不気味なまでの静けさの中、ただ一つこちらに向けられる鋭い意識――。

それは、明らかに殺気だった。

馬車の一行を襲った者と同じかは分からない。だが、こちらの命を狙おうと、近くで機を窺っていることは確かだった。

神経を研ぎ澄まし、より一層周囲を警戒する。杖を持つ手にも自然と力が入った。

シュパアアツ——！

突如、背後から白い縄のようなものが勢い良く飛び出し、キュルケの体を絡め取った。

「きゃっ!?!」

体をぐるぐる巻きにされたキュルケは、勢い余って地面に倒れ込む。体の自由を奪っている縄のようなものは、粘り気のある糸を幾重にも束ねたものだった。

「何なのよこれ……、気持ち悪いっ!」

キュルケは糸を解こうとしたが、それは思いのほか丈夫であり、自力では無理に近かった。多少の火傷も承知で、威力を最小限に弱めた火の魔法で焼き切るという手もあるが、そのようなことに使っている余裕は無かった。先ほど投げかけられた殺気の正体が、直ぐ目の前にいたからだ。

「な……………」

キュルケはその姿を見て、思わずぞっとなった。緑と紫が交じり合った表皮に左右から三本ずつ生えた腕。顔についた幾つもの眼が、皆こちらを睨みつけている。

それは人の形をした、大半の女性は生理的嫌悪感を抱くであろう蜘蛛の化け物だった。体を拘束しているこの糸が、蜘蛛のものと同

じ性質を持っていたとしたら……。奴の目的は自ずと分かる。

——残念ね……。あたしの好みじゃないの。

熱くとりけるようなアプローチなら歓迎するが、捕食されるのだけは真っ平御免だ。そもそも化け物に言い寄られるのは趣味じゃない。

「微熱の炎で……。焼き尽くしてあげる！」

キュルケは唯一自由が効く右手で杖を掲げ、得意の魔法を放った。杖先から生じた炎が渦を巻き、蜘蛛の化け物に向かって突進する。化け物との距離はそれほど離れていない。相手は逃げる余裕すら無い筈だった。

しかし、炎は化け物に届く一歩手前のところで弾け、そのまま消えてしまった。まるで化け物の前に見えない壁が存在するかのよう

に。

——魔法が効かない……。嘘でしょ？

嘘ではない。考えたくも無い事実を目の前に突きつけられ、キュルケは思わず肝を冷す。

その隙を蜘蛛の化け物は見逃さなかった。キュルケは化け物に首をつかまれ、体ごと宙に持ち上げられる。息ができず、何とか逃れようと必死にもがくが、相手の力が強くてびくともしない。その様子を見た化け物がこちらを嘲笑うように顔を歪ませ、キュルケの体を近くの幹に放り投げた。

鈍い音と共に背中に痛みが走る。ぼやけた視界の向こうに化け物の姿が歪んで見えた。指先から伸びた鎌のような鋭い爪を構え、徐々にこちらに迫ってくる。泣き叫んで助けを求めようなどとは微塵も思わなかった。生憎そんな安いプライドは持ち合わせていない。

キュルケの元に辿り着いた化け物が、とどめと言わんばかりに大きく腕を振り上げる。直後、化け物の背後で空気が大きく弾け、奴の体を吹き飛ばしていた。

一体何が起きたのか。当然とも言える疑問を抱きながら、キュルケは視線を彷徨わせる。そして、その存在を視界に捉えた。

木々の間に毅然と立つ、全身青尽くめの人影。右手には同じ色で、人影の背よりも長い杖。顔は隠され、素顔を窺い知ることができない代わりに、エメラルドグリーンの大きな双眸が薄暗い空間に凜然と輝いている。その容貌はさしずめ、青い仮面の戦士と言ったところだろうか。

蜘蛛の化け物がその身を起こし、仮面の戦士へと飛び掛かる。だが、仮面の戦士は怯む様子を見せず、化け物の爪が触れるか否かというところで、逆に相手の鳩尾に杖の端を叩き込んだ。

衝撃で宙を舞う化け物に対し、仮面の戦士の勢いは尚も止まらない。立て続けに杖による猛打を浴びせる。森の中に木霊する怪物の悲鳴。ようやく立ち上がった怪物は、既にふらふらの状態となっていた。

仮面の戦士はベルトの左側に付いている小箱から一枚の紙片を取り出し、それをバツクルの前にゆっくりとかざす。

『freezing strike』

バックルから無機質な女の声が響き、紙片が青白い光となって杖の先端——エメラルドグリーンの小さな水晶球に吸い込まれる。光を全て吸収し、杖が青白い輝きを纏う。一瞬だけ張り詰める空気。仮面の戦士は跳躍し、化け物の脳天に杖を振り下ろした。

化け物の体が急速に凍り付いていく。苦痛の呻きを漏らす間もなく、その体は分厚い氷の塊に変わり果てる。仮面の戦士が杖でもう一撃加えると、氷の塊は破裂するように砕け散った。

仮面の戦士はキュルケを拘束していた蜘蛛の糸を引きちぎり、彼女を自由にさせると、無言のまま踵を返して立ち去ろうとした。

「待って」

キュルケが呼び止めると、仮面の戦士の足取りが止まる。

「どうして、あたしに背を向けようとするの？」

あの身のこなし、そして、あの戦い方には覚えがある。キュルケには仮面の戦士がある人物と重なって見えた。

「何でも自分一人で抱え込もうとしないで……」

その人物が思っていることはだいたい察しがつく。自分に背を向けたのも、危険なことに巻き込またくないからだろう。だが、キュルケにはそれが悲しくて堪らなかった。

背を向けたまま動かない仮面の戦士を、キュルケはただじっと見

つめ続ける。そこだけ時間が止まったような静けさを見せるが、それも長くは続かなかった。

木陰や草むらから何かが幾つも飛び出し、仮面の戦士の周囲を取り囲む。その数五体。皆、先ほど倒した蜘蛛の化け物と同じ姿をしていた。

第5話

第5話…通りすがりの破壊者

五体の化け物が仮面の戦士へと一斉に襲い掛かる。仮面の戦士も臆することなく立ち向かうが、一人で相手をするには流石に数が多過ぎた。しかも、奴らは凶暴な外見とは裏腹に、互いに連携を取りながら効率良く的確に相手を攻め立てる。不利な条件を二つも抱え込んでしまった仮面の戦士の勝ち目は薄い。

事実、最初こそ何とか凌いでいたものの、徐々に押されて奴らの攻撃を浴びるようになっていた。杖による殴打は効いているようだが、最初の化け物に止めを刺した、あの氷付けの技のような決定打には至っていなかった。

ギンッ！

下から振り上げられた化け物の爪が仮面の戦士の胸を捉えた。爪と金属が擦れ合って火花を散らす。細微な傷しか付かなかったものの、その力によって生み出された衝撃までは殺し切れず、吹き飛ばされてしまった。

地面に打ち付けられた衝撃で腰のベルトが外れる。その直後、バツクルの青い水晶球から光が溢れ、仮面の戦士の体を包み込んだ。光が消えると、青い甲冑を着けていた者が本来の姿を表した。

「タバサッ！」

と、キュルケが叫びながら駆け寄り、傷付いた青髪の少女を抱き

起こす。タバサにどう思われようと、彼女を想う気持ちは変わらなかった。

「に……逃げて……」

「いやよ！ あなたを置いて逃げるなんて！」

タバサの言葉をキュルケは拒んだ。何かを抱えて懸命になっている友に何もしてやれず、あまつさえその友を置き去りにして自分だけ逃げることなど、出来るわけがない。

その間にも化け物達が一步、また一步とキュルケ達に詰め寄っていく。

「あんたたち！ タバサをこれ以上傷付けたら許さないわよっ！」

キュルケは威勢良く啖呵を切った。勿論これで怯むような相手だとは微塵も思っていない。だが、言わずにはいられなかったのだ。愛しく想う友を、無慈悲にただ傷付けようとする輩に対して。

五体のうち、先頭にいた二体がキュルケ達に飛び掛った。友の体を強く抱きしめ、キュルケは相手を睨みつける。

その時、両者の間を『何か』が疾風のように駆け抜けた。その『何か』に体当たりされ、化け物達が弾け飛ぶ。地面に軽やかに着地したそれは白を基調とし、前後に車輪が付いた乗り物らしき物体だった。乗り物だと推測できたのは実際に人が跨っていたからだ。

それはタバサと同じように甲冑を纏った仮面の戦士だった。タバサのとは何もかもが違っている。特に目を引くのはピンクに近い赤や白といった奇抜な配色や、胸から左肩にかけて配置されている十

字の意匠だろうか。

「やっと見つけた」

仮面の戦士は言いながら車輪の付いた物体から降り、化け物達に向き直る。それに合わせ、奴らの注意もキュルケ達から自然とそちらに向かっていた。

「手掛かりが少ないせいで、あちこち探し回ってクタクタなんだ。さっさと終わらせてもらうぜ」

言うが早いか、最も近くにいた化け物の一体に颯爽を近づき、奴に目掛けて拳を一発。反撃を払いのけた後、立て続けに拳と蹴りの連打を浴びせ、相手を怯ませた。

「こっちも増やすか」

そう言って仮面の戦士が取り出したのは、長方形の体をなした一枚の紙片。それをベルトの白いバックルへ投げるように差し込み、両側の取っ手を両手で中央に向けて軽く押し込んだ。

『attack ride! illusion!』

いささか誇張美味な男の声がバックルから響く。その直後、仮面の戦士と同じ姿の実体が周りに生み出された。その数は全部で四体。全てを含めれば化け物達と数で互角になる。

先ほどタバサがやったのもそうだが、キュルケは仮面の戦士が使う紙片のことが気になっていた。風系統の高位に属する『偏在』と同じ効果の発現を、詠唱も無しにやってのけたのだ。マジックアイ

テムの類とも取れるが、そのような物が存在するとは聞いたことがない。今の段階では明かされていないことだらけだが、それでも確かだと言えることが一つだけある。それは負ける気がしないということだ。勿論仮面の戦士が。

その理由が最初の攻撃から垣間見えた技量の差なのか、はたまた自分達の危機に颯爽と現れた勇者への期待から来る唯の思い込みなのかは分からない。だが、深く切り込まなくとも彼女の考えが正しかったことは、目の前の光景が証明していた。数では互角同士の戦いは、仮面の戦士が優位に立っていた。

化け物達は連携を活かした集団戦闘にこそ長けていても、タバサの時にもあったように個々の力はそれほどでもないらしい。相手との技量差もあってか、各々剣や銃を手にした仮面の戦士の分身に、ある者は剣で体を貫かれ、またある者は銃から放たれた光弾によってその身を焼かれる羽目になった。唯一共通していることは、どれもまるで体内に少量の火の秘薬を仕込んでいたかのように小規模な爆発を起こして果てたことだろう。

この時点で化け物の残りは一体だけとなっていた。仮面の戦士は新たに紙片を取り出すと、先ほどと同じようにそれをバツクルに差し込んだ。

『final attack ride! dededecade!』

仮面の戦士と化け物の間に巨大な光の幕が幾重にも張り巡らされ、両者を結ぶアーチを形成する。光の幕には仮面の戦士の顔を模った紋様のようなものが描かれていた。

「ハッ！」

空高く飛び上がった仮面の戦士は飛び蹴りの構えを決め、光のアーチを潜りながら化け物に目掛けて急降下する。狙った獲物は絶対に外さないと言わんばかりの鋭い蹴りが炸裂し、化け物の体は爆炎と共に塵となって一片も残らずに消え去った。

第6話

第6話 風の精は騒がしい

辺りには既に静けさが戻っていた。化け物の姿は既に無く、近くに伏兵が潜んでいる様子も見られない。仮面の戦士は近くに落ちていた青き強者の環を拾い上げると、それをタバサに差し出した。

「ほら、大事なモンだろ？」

「……ありがとう」

タバサは疲労でふらつく体を何とか立たせると、青き強者の環をその手で受け取る。

「まだお前にくたばれるとこっちも困るんでな、ヴァネージュ」
「！」

タバサの表情が急に険しくなる。まるで自分しか知らない筈のことをすっぱりと言い当てられ、途端に相手に対する警戒が強くなった、そんな感じだ。

「なぜ、それを知ってるの？」

「こっちも色々とワケありでな……、そうだ」

仮面の戦士は何かを思い出したように話を切り出した。

「俺に力を貸せ。そうすれば事も楽に進められる。お前らにとって
もメリットがあるぞ」

「あら、随分と強引ね。そういうのは嫌いじゃないけど、もう少し

手順を踏むことに拘ってもいいんじゃない？」

キュルケはやりわりと言い返す。それはそうだ。素性はおろか、素顔も明らかでない人間に頭ごなしに協力を求められたところで、素直に応じられるわけがない。

「断る。信用できない」

タバサも同じだった。もっともその表現の仕方はキュルケとは違い、簡潔且つ直接的なものだが。

「そうか。なら気が向いた時でいい。そのうちまた会うことになるだろうからな」

仮面の戦士はキュルケ達に背を向け、車輪の付いた物体に跨る。

「じゃあな」

仮面の戦士はここから去るつもりでいるようだ。

「待ちなさい！」

キュルケが大きな声で言った。仮面の戦士の動きが止まる。

「助けてくれたことには感謝するけど……、あなた、一体何者なの？」

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけ」

仮面の戦士が振り向きざまに言った。ほんの少し置いて、獣が相手を威嚇する時に発する低い唸り声のような音を大きく響き渡らせ、

車輪の付いた物体がその場から素早く去っていく。後に残された二人は黙ってその後姿を見送った。

——はあ……。

ひと段落して緊張の糸が切れたのか、急に体が重くなったような気がした。まるで疲労が猛毒のように体の中を一気に駆け巡っていく感覚。タバサに対して訊きたいことも色々あるが、今日のところは何もかも忘れて眠ってしまいたい気分だった。

「きゅるるう〜！ お姉さまあ〜！ 大丈夫なのねえ〜！？」

舌足らずな声がどこからか聞こえてきた。特徴的な語尾が子供っぽさを一際感じさせる。どうやらこちらのことを呼んでいるようだが……。

「シルフィはもうお姉さまのことが心配で心配で、胸がしぼんでしまいそうだったのねえ〜！」

——それを言うなら胸が張り裂けてしまいそうだ、でしょうが……。

キュルケは心の中でツツコミを入れる。しかし、この声はどこから聞こえてくるのだろう。何やら上の方からのようだが、視線を上に向けてもタバサの使い魔である風竜のシルフィードが、今まさにこちらに向かって降りようとしている姿が見えるだけだった。

シルフィードが優雅に降り立ち、その六メイルはあろうかという巨体をこちらに悠然と晒す。

「呼んだの？」

キュルケが訊く。タバサは首を横に振った。主人の言い付けをただ守るだけではなく、主人の為に率先して行動できるとは正に使い魔の鑑。これは十分に誇れることなのだが、タバサは何故か自分の使い魔のことを鋭く睨みつけていた。

「お、お姉さま、どうしてそんなに怖い顔をするのね？ シルフイは何も悪いことは……」

舌足らずな声が突然途切れた。キュルケの方に首を向けたシルフィードが目を丸くしている。

「きゅ、きゅるッ！？ お姉さまの隣にいるのは赤毛のあばずれッ！」

何とまあ、酷い言い草だろう。普段ならお仕置きとばかりに特大のフレイム・ボールの一発でも飛び出すのだが、今はそれどころではなかった。

「りゅ、竜が喋ってる……！」

キュルケはシルフィードの姿に啞然とする。先ほどから聞こえていた舌足らずな声は、目の前にどっかりと腰を下ろすタバサの使い魔の口から出ていた。

「し、しまったのねッ！ お姉さま以外の人間の前でうっかり喋ってしまったのねえッ！」

シルフィードも大きな口から驚きの声を上げ、その様子にタバサ

はただ一人頭を抱え込んだ。手にした青き強者の環の水晶球に春の木漏れ日が差し込み、柔らかな淡い輝きを放っていた。



ハルケギニアで最も美しい湖と謳われるラグドリアン湖。トリステインとガリアの国境を跨ぐように位置するその湖畔から少し離れたところに、タバサの実家はある。

森の中での騒動から三日後。二人はトリステイン魔法学院からタバサの実家へと進路をとるシルフィードの背に乗っていた。きつかけは森の中での騒動が収まった後、人語を操る摩訶不思議な竜に対して興奮も未だ冷めやらないうちにタバサが発した言葉だった。

「実家に行くから一緒に来てほしい」

それ以外にタバサの口から語られることは無かった。だが、こちらとてほぼ一年間のらりくらりと無駄に付き合ってきたわけではない。他人には理解し難い言葉でも、自分には手に取るように分かる。

つまり、彼女はやっと重い腰を上げたのだ。しかも今まで口にすることも無かった生まれ故郷へキュルケを導こうとしている。そこで何が待っているのか想像もつかないが、友が示してくれた道を前にして怯んでなどいられない。キュルケはタバサの言葉に素直に応じた。

こうして今に至るのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5091g/>

仮面ライダーヴァネージュ

2010年10月28日08時07分発行